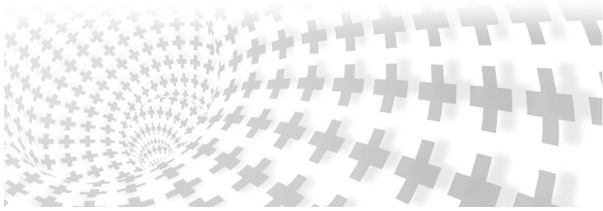


こんにちは



日本分光株式会社本社を訪ねて

〈はじめに〉

桜の花も散り終わり、新緑溢れる5月初旬、日本分光株式会社（英名：JASCO Corporation、以下、日本分光と記す）の本社を訪問してきました。日本分光はご存知のように本誌「ぶんせき」の後表紙にもしばしば登場する会社です。今回の取材では、本社内にある分析センターを取材させていただきました。この分析センターは、装置を購入された方や購入を検討されている方などがサンプルを持ち込み、実際に装置を使用して試してみることができるようになっています。また定期的に顧客向けのセミナーなども開催しているとのことでした。

〈会社沿革〉

日本分光の本社は、精密機械工業の会社が立ち並ぶ、JR八高線沿線、北八王子駅から徒歩3分のところに位置しています（写真1）。この地域はかつて絹織物産業・養蚕業が盛んであったために、「桑の都」及び「桑都（そうと）」という美称がありましたが、今では工業・物流の拠点として、認知されている地域であります。またその周辺部も含め23の大学等（大学・短期大学・高専）



写真1 現在の日本分光株式会社社屋

があり、約11万人の学生が学ぶ全国有数の学園都市として活気にあふれる都市となっています。日本分光は1963年に、日本住宅公団（現・都市再生機構）によって造成された石川工業団地に「公害のない工場」として都内より一番乗りで移転しました。現在では北八王子駅近郊はオリンパス株式会社、アジレント・テクノロジー株式会社等の精密機器会社や、西濃運輸、日本通運等のロジスティック会社が立ち並んでいます。

ここで日本分光の沿革について述べますと、同社は1958年（昭和33年）4月に設立し、現在、従業員数280名、国内グループ会社の従業員を含めて約600名、今年の4月に創立56年を迎えた分析機器の老舗メーカーです。また、1960年（昭和35年）の日本分析機器工業会発足当初から同工業会の理事会社として参画し、分析機器の発展に大きく寄与しています。同社の一番の特長は、東京教育大学（現・筑波大学）附属光学研究所での赤外分光光度計の開発研究成果を企業化すべく、昭和33年に創立された大学発ベンチャー企業であることです（写真2）。

現在の会社方針は、「顧客感動」「スピード経営」「おもしろい会社」「一步前に」です。また、社是は「段取・真剣・尻拭」、「和敬互助の精神」、「初心忘れるべからず」です。今ではPDCAやチームワークに相当する言葉や「能」を追究した世阿弥の言葉を掲げています。大学発ベンチャー企業としてこのような社風、社是として現在も受け継いでいます。

日本分光の主力製品はその企業名が示すように分光にかかわる計測機器です。今回の取材で訪問した分析センターには、FT-IR、レーザーラマン分光光度計、紫外可視分光光度計、分光蛍光光度計、円二色性分散計等の分光分析機器とHPLC/セミ分取HPLCや超臨界流体クロマトグラフィー（SFC）等の分離分析機器が並べられていました。また、一般分析だけでなく半導体関連機器・光応用機器として近接場光学顕微分光システム（NFS）やエリプソメータ等、医薬品試験機器として自動溶出試験器やオンラインHPLC溶出試験システム等

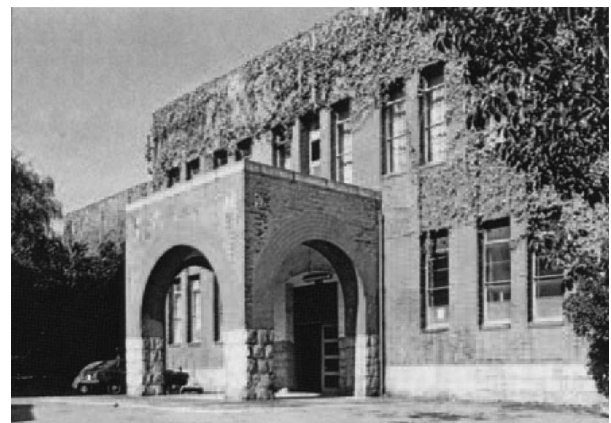


写真2 東京教育大学附属光学研究所

もラインナップされており、まさに光・分光の技術を駆使した製品を取り扱っている企業であります。

〈日本分光の製品開発への取り組み〉

紫外可視吸収スペクトルや赤外吸収スペクトル、蛍光スペクトルに関してはすでに機器分析の基本として、分析関連の研究室や各大学の機器分析センターなどに設置されている設備であることと思います。そしてこのぶんせき誌の読者である方の大半は、実際に学生実験や研究・開発の現場でその測定を行ったことがあることと思います。筆者も学部学生時代に中和滴定や酸化還元滴定などの歴史的でクラシカルな容量分析実験の次に紫外可視吸収スペクトル測定や、蛍光スペクトル測定による定量分析などの分光分析実験を教わりました。大学に入って初めてフラスコやビーカーのガラス機器ではない実験設備を使えたことに感動したことを思い出します。これらの装置は正に「よく使われる」・「汎用的」な装置であり、筆者も過去に所属した研究室にて、様々なメーカーの装置を利用してきました。現在筆者の所属大学にある共通利用機器センターでは日本分光製の分光装置が導入されており、必然的に使用する機会が増えてきたのですが、同社の製品はスペック的なところだけではなく、ソフトウェアや筐体のデザインを含めて、日本分光らしさが溢れる、特徴的な装置となっているということを感じながら使用しています。ユーザーの立場から筆者の感じる例を挙げますと、今でこそ顕微 FT-IR 装置が色々なメーカーから発売されるようになってきましたが、大半が顕微専用機や外付けでの計測専用として発売されています。それに対し日本分光では、外付け機はもちろん販売しているにもかかわらず、通常の FT-IR の「オプション品」として顕微ユニットを販売している点が特徴的です。もちろんスペック的には、外付けの専用機と比較して限定的ではありますが、それでも簡単なアタッチメントを操作するだけで、顕微 FT-IR の計測ができ、しかも外付け専用機よりも手頃な価格で手軽に顕微 FT-IR を計測できるようになったことに深い感銘を覚えたのを今でも思い出します。

日本分光がどのようにして汎用製品の差別化を図っているのか、今回の取材で最も興味を惹かれた部分でありました。

今回の取材で教えていただいたことは、今日、分析機器のカバーする範囲が、研究開発用・ラボ用の分野から医療・環境・計測の分野まで広がっている中で、同社は特にニッチな研究開発用・ラボ用の分析機器にこだわり会社の力を集中させて、研究者や技術者を支援しているということであり、特に「科学者が科学者に奉仕する集団」を合言葉に研究者・技術者が興味をそそる製品を提供しているということです。そして、現在、ユーザー独自のニーズに対応するカスタムメイドに積極的にチャレ



写真3 所せましと並べられた一点ものの分光関連オプション品



写真4 分光分析技術部次長赤尾様から日本分光製品のコア技術について説明を受けている様子

ンジし「おもしろい会社」作りに取り組んでいるとのことでした。これはまさに、顧客からの要望をできる限り実現しようというものであり、先に述べたアクセサリー型の顕微 FT-IR にも現れているのではないのでしょうか。このような顧客からのニーズに積極的に応えて行く会社の成果を実証するものとして、今回見学をさせていただいたショールームには、棚に所狭しと並べられた分光器製品のアクセサリー類がありました（写真3参照）。これらはすべて顧客からの要望により開発したものであり、しかもここには他の顧客からも要望がありそうなものを選別して置いてあるので、実際にはこの10倍以上の「一点もの」のアクセサリーを作ってきたとのことでした。装置アクセサリーだけではなく、サンプル調整のための関連商品（薄片調製のためのマイクロトーム、タブレット製造のためのプレス装置）などもユーザーに使いやすく、機能を絞ってお手頃な価格で提供しているとのことでした。これもまた顧客からの要望を可能な限り受け止めるために行っているとのことでした。

「最先端の現場では、10人の研究者がいれば、それぞれ用途が違い、それを満足できなければいけない。」と機器の紹介をしてくださった長谷川氏は熱く語ってくだ



左から濱田氏、郡川氏、赤尾氏、山脇氏、「ぶんせき」編集委員（鈴木、柳田、西島）、長谷川氏、高橋氏

写真 5 日本分光本社前にて記念撮影

さいました。最先端で研究開発を行う研究者とそれに^{こた}え一点ものの製品を作り出す企業。そこから生み出される成果がこれまでの日本の技術力を支えてきたといっても過言ではないでしょう。そして、ここにも大学発のベンチャー企業としてスタートした日本分光の企業魂が垣間見えた気がします。

〈おわりに〉

今回連休の合間のお忙しい中を割いて、会社案内をしていただきました、日本分光の皆様がこの場を借りて厚く御礼申し上げます。刀工職人や陶芸家が芸術的な作品を創り出すように、光分析を極めるために顧客のマニアックなニーズにも応え、ほぼオーダーメイドに近い形



左から野坂氏、佐藤氏、渡邊氏、編集委員、森本氏、内山氏、渡邊氏

写真 6 日本分光の未来を担う若手エンジニアの皆さんと

で製品やアクセサリーを作製している日本分光の姿勢、またそこで働く方々が生き生きと働いておられる姿を拝見することができます。光科学に関わる研究者の一人としてこれからの製品技術の発展が非常に楽しみになりました。またそれらの装置を駆使して新たな研究を展開することができるのが非常に楽しみです。

なお、日本分光では移動車に各種装置を積んで、全国津々浦々まで行くことのできるデモ車を用意しているとのことでした。ぜひ日本分光の製品を体験するために声をかけてみてください。

〔横浜国立大学大学院工学研究院 西島喜明〕

原稿募集

話題欄の原稿を募集しています

内容：読者に分析化学・分析技術及びその関連分野の話題を提供するもので、分析に関係ある技術、化合物、装置、公的な基準や標準に関すること、又それらに関連する提案、時評的な記事などを分かりやすく述べたもの。

但し、他誌に未発表のものに限ります。

執筆上の注意：1) 広い読者層を対象とするので、用語、略語などは分かりやすく記述すること。2) 啓蒙的であること。3) 図表は適宜用いてもよい。4) 図表を含めて4000字以内（原則として

図・表は1枚500字に換算）とする。

なお、執筆者自身の研究紹介の場とすることのないよう御留意ください。

◇採用の可否は編集委員会にご一任ください。原稿の送付および問い合わせは下記へお願いします。

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2

五反田サンハイツ304号

(公社)日本分析化学会「ぶんせき」編集委員会

〔電話：03-3490-3537〕